

伝統技法にとらわれず、 漆器の新たな可能性を切り開く

秋田・川連塗 寿次郎(じゅじろう)

漆器の木の地の試作には、時間や手間、コストがかかる。
その問題を、3Dデータの検証で一気に解消。
今までにない、斬新な川連漆器を作り上げた。

伝統を守りつつ、新商品の開発に挑戦

約800年前に武具の漆塗りから始まり、江戸時代後期には藩の保護のもと、椀や膳、重箱など日用品の漆器づくりで発展した漆器の町、湯沢市川連。国の伝統的工芸品「川連漆器」の製造に関わる工房が町のあちこちに点在している。その中のひとつ、明治初期創業で漆器の製造、修理、販売までを手がける「川連塗 寿次郎」は、伝統的な漆器を作りつつ、現代の暮らしにマッチした“新作”の開発にも積極的な工房だ。昨年から今年にかけては、当センターのデザイン相談員の支援のもとで3Dデータの制作や形状の検証を実施し、「川連漆器」の中では珍しい楕円形型の器や外側を面取りしたカップを開発。さっそく注文を受けるなど、顧客から好評を得ている。

お客様の意見・要望に応え続ける

「新作のヒントやアイデアは、いつも“お客様の生の声”からいただく。我々にはない斬新な発想ばかりで驚かされる」と話す「寿次郎」の佐藤史幸氏。顧客との会話や、展示会に出展した際にお客様アンケートを取って開発のヒントを探っている。おとし、食器や食卓関連商品の展示販売会「テーブルウェア・フェスティバル」(会場：東京ドーム)に出展したときには「楕円形の器が欲しい」との声があった。しかし、「川連漆器」は轆轤(ろくろ)挽きの椀が主力商品であり、同心円状の成形は得意だが、それ以外の形は量産が難しい。また、試作・開発

伝統的工芸品をはじめとする県内製造業者を対象に、産業デザイン、製品開発、マーケティング等についての専門的な助言等を行います。

【お問い合わせ】

あきた企業活性化センター／知財・研究管理担当
(あきた産業デザイン支援センター)まで。



新作の楕円形の器と、外側を面取りして作ったカップ。
「楕円形の器は、カレーやパスタの皿、洋菓子の菓子器など、
さまざまな使い方ができる」と佐藤氏。

を行うにもコスト面での負担が大きく、リスクもある。木地作りの試行錯誤が長引けば、木地師の作業時間を大幅にロスする心配もあった。

3DCADによる形状検証を実施

そこでデザイン相談員は、佐藤氏の構想をもとに3DCADを使用し、最適な寸法や角度を検証。その図面を木地師に見てもらい、製法の検討や原価の算出を行った。「詳細な形状を割り出すことができたので、木地師さんの作業時間を短縮し、効率的に開発を進められた」と佐藤氏。さらに、新作のブランド構築の支援も行った。「プレゼンの表現の仕方、カタログに載せる文章や写真など、さまざまな相談にのってもらった。商品開発も大事だが“売り方”も大事だと思った」。新作のカップと楕円の器は、顧客の反応も良く、デザインの評価も上々だ。「デザインの相談を通じて視野が大きく広がった。今後もどんどん相談して、秋田を代表する新作を開発したい」。伝統の川連漆器には希望に満ちた新風が吹いている。

秋田・川連塗 寿次郎

〒012-0105
秋田県湯沢市川連町字大館下山王119-3
Tel.0183-42-3576
Fax.0183-42-4616
<https://www.facebook.com/fujirou>



川連漆器・塗り部門の伝統工芸士である佐藤史幸氏。川連漆器の魅力や製造工程をFacebookやInstagramなどを使って積極的に発信している。



箸の塗りの作業。1本1本、塗って乾かしては研磨して…という作業を十数回繰り返して、丈夫で艶やかな表面に仕上げる。



デザイン相談員と打ち合わせをする佐藤氏。新作をどのようにして量産するか、どうPRしていくか、今後の戦略を検討中。